

新島 襄の言葉

宮澤 正典

(女子大学現代社会学部特任教授)

一八八四(明治一七)年一〇月三一日付、妻八重宛の新島書簡。同年九月一八日イギリスのリバプール港を発ち、二八日にニューヨークに着いて、アメリカからの多分第二信。

新島はこの欧米旅行をしばしば養生の旅と述べているが、この日までにハーディー夫妻をはじめ多くの旧知に再会した。また「今日ハ二十年前初てアンドワ神学校に参り候二十年前に御坐候」と書き、フィリップス・アカデミー時代に下宿したミス・ヒドウン宅に泊って感懷を深くしている。センチメンタル・ジャーニーでもあった。

しかし、常にと同志社に思いを馳せていて、市原盛宏ら宛では、大学設立のための募金などの目的を達成できなかった。「再ヒ諸君ニ御面会申マジト決断仕候」などと書いている。前年スイスのサンゴタル登攀中に呼吸切迫、容態悪化して、苦痛のなかで遺書をしたためたように、安静保養を必要とし健康不安に直面しながら、八重宛の各書簡にも、上掲のような同志社への思念を綴っていた。むしろ「我カ東洋ノ敗興ハ偏ヘニ基督教会ト該主義義大学ノ二物ニ関スルト固ク信シテ疑ハサ」る(市原他宛)ことの実現を期す気魄に満ちた旅であった。

何卒昨春之リヴァイバルの精神を失はず信仰を以て学校の基礎となし、學術を以て左右の翼と爲し弥振ひ、弥勉め、生徒諸君之主基督の爲又邦家の爲御尽力あらん事を日夜祈居候○新築之家は彰栄館と称せられ候由、誠に美はしき名と存し、又我輩之事業之其名に負かざる様致度存候……